

患者の自覚症状により副作用の早期発見を可能とする方策に関する研究

研究開発代表者 慶應義塾大学薬学部 教授 望月 眞弓
研究開発協力者 慶應義塾大学薬学部 助教 丸山 順也
研究開発協力者 慶應義塾大学薬学部 博士課程 臼井 美紗

背景・目的：医薬品副作用の重症化防止のためには、比較的症状の軽い初期症状を患者が早期に副作用と認識し、医療者に相談することをサポートするシステムが必要である。本研究では、医療文書やアンケート調査等を用いた解析により『自然語での副作用用語データベース』を構築するほか、患者本人またはその介護者が副作用の自覚を適切に医療機関に相談・報告できるようなシステムの開発を行い、臨床での試験運用を行う。

副作用の自覚症状に関する自然語表現を収集



ソーシャルメディア解析

アンケート調査

医療文書解析

くるしい

苦悶感

自然語での副作用用語
データベース

専門用語コード

ふだんの話し言葉（**自然語**）から自覚症状を検索し、副作用の可能性を早期に認識できる

感じていらっしゃる症状を教えてください

症状を感じる箇所から選択してください

体の一部分	代表的な症状
頭・顔・首	目
胸・心臓・肺	口・喉・耳・鼻
消化器系	肩・腰・背中
手足	関節・筋肉・骨
泌尿器・生殖器	皮膚
	全身・半身 (まひなど)

あなたが感じている症状

- 頭痛
- 胃もたれ

該当する症状がない場合は入力してください

次へ

（開発中のシステム画面）